

説教余滴 2019年7月14日『ガリラヤの風薫る丘で』

教会生活は、さまざまな思い出の蓄積を残してくれます。礼拝であったり、修養会のような行事であったり、人間であったりします。聖書、讃美歌も信仰生活に欠かせないものですから、多くの思い出と結びつきます。

当月の讃美歌 21 も、歌う度にひとりの人を思い出します。

御殿場十字の園に、林富美子先生が居られました。寝たきり老人のお世話をするホームの女医さんです。たくさんのことを教えてくださいました。

「ここのお年寄りは、入ってきた時は寝たきりだったのよ。ここで人間としての尊厳を大事にされて生活するようになると、次第に起き上がり、歩くようになり、自分のことは自分でできるようになるの。」寝たきり老人の施設と聞いてきたのに、ずいぶん歩いていますね、という私の質問に対する答えでした。この方たちはずいぶん劣悪な生活環境でした、と教えてくださいました。

林先生は、1986（昭和 61）年、朝日社会福祉賞を受賞されました。朝日新聞記者の紹介文。

「林さんは東京女子医専（現東京女子医大）卒業と同時に、当時不治の病とも言われたハンセン病治療に携わった。四箇所の国立療養所に約 20 年。46 年からは御殿場市内のキリスト教系の特別養護老人ホームのたった一人の医師としてお年寄りたちを見守っている。また（救ライ）協会の勧告でのハンセン病治療活動にも例年参加。・・・後略」

数年後、頌栄女子学院の生徒と共に訪問。先生のご希望を伺ったところ、私の好きな讃美歌を、生徒さんの可愛い声で聞かせてほしいとのことでした。同行した音楽教師が今は歌えません。練習して、来年は歌います、と申し上げ、再会を約束しました。林先生の愛唱讃美歌が『ガリラヤの風薫る丘で』でした。先生も音楽教師もすでに帰天されました。